

ぐんま幼児教育センターだより



56号

群馬県総合教育センター
所長 春田 晋

試行錯誤と葛藤のなかに芽生える力 ―子どもと共に考え、歩む―

ある園での参観の際、園児同士の思いがぶつかり合い、その一人が声をあげて泣き出す場面がありました。悔しさと悲しさで言葉にならない様子の子どもに対し、担任の先生はすぐに正解や介入の裁定を下すのではなく、静かにその場にしゃがみ込みました。泣いている子の目線に合わせ、肩を優しく抱き寄せながら「悔しかったね」「どうしたのかな?」と、焦らず根気強く言葉を待つ姿がありました。先生は「何があったの?」「ごめんなさいは?」と問い詰めるのではなく、溢れ出る感情を丸ごと受け止めながら、子ども自身が「何が起きたのか」「どうしたかったのか」を自分の言葉で語り出せるよう、丁寧に想いを引き出していました。そしてお互いの気持ちを整理した上で、「じゃあ、次からはどうすればみんな楽しく遊べるかな?」と、失敗した体験を元に子ども自身に解決策を考えさせていたのです。

現代社会では、効率や最短の正解が求められるあまり、大人が先回りして障害物を取り除き、傷つかないレールを敷いてあげたくなる場面が増えています。しかし、失敗や挫折を一切経験しないまま大人になった子どもは、予期せぬ壁に直面したときに立ち尽くしてしまうかもしれません。失敗を怖がってしまう子どもたちが増えていると言われる今だからこそ、幼児教育における「遊びの中での試行錯誤」が大きな意味をもちます。

遊びの中での友達とのぶつかり合いは、決して回避すべき負の出来事ではありません。それは、他者の存在に気づき、自分の感情をコントロールし、どう修復すればよいかを学ぶ絶好の「学びの機会」です。安全が保障された幼児教育の場で、失敗し、葛藤し、そこから他者の力を借りながらも自分の足で立ち直る経験を重ねること。これこそが、将来のたくましさや折れない心「レジリエンス」の根っことなります。

大人があらかじめ敷いたレールの上をただ走らせる教育は容易かもしれません。しかし、寄り添い、話し聞き、子ども自身の言葉と試行錯誤を引き出す指導には、保育者としての深い洞察と忍耐、そして高度な専門性が求められます。子どもの「どうしてもうまくいかない」という心の痛みにじっくりと向き合い、自ら考えて前へ進もうとする芽を温かく見守ること。皆様が日々現場で実践されているその丁寧なアプローチこそが、子どもたちの「自分で考える力」と「自分を信じる自己効力感」を育てています。

遊びを通して学び、葛藤を乗り越えて得た自信は、小学校以降の学習や社会生活において、生きるための確固たる基盤となります。失敗しても恐れず、「自分で考えて、自分で決めて、自分で動き出す」子どもたちを育てていくために、現場で子どもたちと向き合う先生方の存在と温かな関わりが、何よりも不可欠です。

当総合教育センターも幼児教育センターを中心に、現場の第一線で子どもたちと共に歩まれる皆様の専門性向上と日々の実践を、全力で支えていきたいと思っています。これからも共に手を携えて、豊かな学びの場を創り出していきましょう。

お問い合わせ

幼児教育センター

<https://center.gsn.ed.jp/yokyo>

0270-26-9203



youji@edu-g.gsn.ed.jp

SNSも

見てね



今年度の研修講座

～実施状況と受講者の声～

- 1 ページ：群馬県総合教育センター所長による巻頭言
- 2 ページ：今年度の研修講座について
- 3 ページ：今年度の調査研究について
- 4 ページ：幼児教育に関するコラム

幼稚園等新規採用教員研修

研修日数 9 日（集合 5 日 オンライン 4 日）

幼稚園等中堅教諭資質向上研修

研修日数 9 日（集合 5 日 オンライン 3 日 選択 1 日）

【6月10日より】

発達には個人差があり、その状況も変化していくものである。1人の目で見ても思い込みに縛られずに多方面からあらゆる可能性を考えて幼児の姿を理解していこうと思いました。

【7月3日より】

自分の短所を改めて言語化し、リフレーミングすると少しだけポジティブに捉えることができた。自分が変わることで職場や家庭、社会も変わるという言葉が心に残った。今後の人生にかاشていきたいと感じた。

【6月3日より】

保護者に対して共感的理解をした上で、「話してくれたことに対して感謝する」「保護者をこれ以上落ち込ませないように話す内容を選ぶ」「保護者の頑張りをねぎらう」「無理をしないでねと伝える」など、具体的にどのような言葉を掛けるか、どんな様子で話を聞いたり話したりするのかを知ることができました。

【9月30日より】

幼保こ小接続について、やはり、まずは相互理解が大切であることを、継続するためには皆で考えていく必要があることを痛感いたしました。幼小連携担当としても、率先して行動に移しつつ、皆で考え合う雰囲気づくりをしていきたいと思いました。

幼稚園等 3 年目経験者研修

研修日数 2 日（集合 2 日）

【6月5日より】

遊びは内発的動機づけが満足される楽しさを感じられることが大切であると学んだため、その楽しさを感じられるような環境を構成していきたい。

改めて子どもたちと実際に関わる上で自分がどんな保育をしているのかを見つめ直す機会ができて良かったです。子どもたちは自分が経験した事を表現したりする事で自信を持って活動に取り組めたり、できるのだと思いました。

幼稚園等 5 年経験者研修

研修日数 2 日（集合 1 日 オンライン 1 日）

【6月12日より】

子供のためにはと思い、つい口出しをしてしまうことがあるので、子供自身の主体性を大人が止めてしまわないように子供たちと関わっていききたいと思いました。また、現在のクラスについての課題を設定して、具体的な手立てや目指す姿を実際にワークシートに記入し、他の絵の先生方と情報共有したことで、自分の考えとはまた違った考え方があるんだって言うことに気づくことができました。

幼児教育と小学校をつなぐ研修講座

開催日数 4 日（8月3日 8月24日 11月10日 12月15日）

【8月3日より】

今日の講義を聞いて、幼小連携の大切さ、また難しさも感じました。今まで小学校の目線でしか講義を聞いたことがなく、幼稚園でどのような教育がされているか知るいいきっかけになりました。ただ、幼稚園でやっていることと学校とのギャップも感じ、子どもたちの不安につながってないか心配にもなりました。

【8月24日より】

幼児期の活動を知らなければ子どもを正しくみとることはできないという言葉が強く心に残りました。1, 2年生はまだまだいろいろなことに関して初心者、経験が浅いというイメージがどうしてもあり、任せることができない場面もありましたが、幼児期の経験を知ることで、さらに力を伸ばす教育ができるのではないかと感じました。また、幼児期の遊びの経験が学びにつながるというお話では、教材との出会い方も重要であることを知りました。2学期の授業からは、特に導入に力を入れ、学ばせるのではなく楽しいから学ぶという子どもたちの姿を見られるように努力したいと思いました。

令和 8 年度研究について

主題 子供に内在する非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期の教育

副主題 小学校一年生の姿を通して、就学前教育の質を問い直す

幼児教育センターでは令和6年度から「子供に内在する非認知能力の発揮及び伸長を促す架け橋期の教育」を主題に、係研究を進めています。3年次の令和8年度の副主題は「小学校一年生の姿を通して就学前教育の質を問い直す」です。

令和5年2月の中教審審議会まとめ（学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について）には、以下のような記載があります。

遊びを通して学ぶという幼児期の特性に関する認識が、社会的に共有されているとはいえず、幼児教育については、**いわゆる早期教育や小学校教育の前倒しと誤解されることがある。**（中略）**小学校以降の教育を見通すことと前倒しをすることは違うことに留意しながら、幼児教育の充実を図ることが求められている。**

そこで幼児教育センターでは、質の高い幼児教育を受けた子供たちが、小学校の教育活動を通してどのように非認知能力を発揮・伸長していくのか追跡調査し、就学前教育の質について問い直すきっかけにしたいと考えました。昨年度から保育を参観させていただいている高崎市の公立幼稚園と、進学先の小学校にご協力いただき、子供たちの小学校での様子を追跡調査しています。

目標への情熱
粘り強さ



楽観性



自立心・主体性



自信・自尊心



好奇心
感受性



探究心
挑戦意欲

子供たちの成長は、幼児教育施設を卒園した後も続いていきます。小学校は、園で育まれた様々な非認知能力を、学校生活の中で発揮・伸長するための環境の構成を工夫していく必要があります。

引き続き子供たちの様子を追跡しながら、園での育ちが小学校にどのようにつながっているのか、一年生の姿から伝えていきたいと思います。

研究の成果は、幼児教育センターだより57号に掲載する予定です！

コミュニケーション力



協調性・協同性

「教える」より「見せる」——子どもは大人の姿から学ぶ

「子は親の鏡」(ドロシー・ロー・ノルトの言葉より)

幼児教育センター
主任指導主事 右井 義人



「お客さんが来たら、あいさつしようね」

漫画の1コマ目では、先生が子どもたちにあいさつの仕方を伝えています。2コマ目では、来園したお客さんに、少し恥ずかしそうに「お……おはようございます……」とあいさつする子どもの姿が描かれています。ところが3コマ目では、先生が自ら笑顔で「おはようございます!」とあいさつすると、子どもも自然に「おはようございます!」と返しています。そして4コマ目で先生は、「見本を見せることが大切なんだ!」と気付きます。

この漫画から、皆さんはどんなことを感じるでしょうか?

子どもに何かを身に付けてほしいと思ったとき、私たちはつい「教えよう」とします。「あいさつをしましょう」「靴をそろえましょう」「ありがとうを言いましょう」「話を聞くときは相手の目を見ましょう」……。もちろん、言葉で伝えることは大切です。しかし、子どもにとっては、大人から言われた言葉以上に、「目の前にいる大人がどうしているか」が大きな学びになります。

例えば、先生が子どもに「元気にあいさつしましょう」と声を掛けながら、来園者に小さな声であいさつしていたら、子どもはどちらを手本にするでしょうか。反対に、先生が笑顔で相手の顔を見て、「おはようございます」と気持ちよくあいさつしていたら、子どもはその姿を見ながら、「あいさつって、こうするんだ」と感じるのではないのでしょうか。

幼児期の子どもは、周囲の人の姿をよく見ています。そして、言葉だけではなく、表情、声の大きさ、相手との関わり方などをまるごと受け取りながら学んでいきます。

だからこそ、「子どもに〇〇してほしい」と思ったときには、「まず自分はどのようにしているだろう」と立ち止まって考えてみるのが大切なのかもしれません。

「ありがとう」と言ってほしいなら、まず大人が「ありがとう」と伝える。
「話を最後まで聞いてほしい」なら、まず大人が子どもの話を最後まで聞く。
「友達に優しくしてほしい」なら、まず大人が子どもや周囲の人に温かく接する。

そう考えると、保育の中には、意図的に「教える」場面だけでなく、私たち大人が日々の生活の中で「見せている」教育がたくさんあることに気付きます。

そして、これは幼児期だけの話ではありません。小学校への接続を考える上でも大切な視点です。幼児期に育まれた学び方や人との関わり方は、小学校以降の生活や学習の土台となります。だからこそ、「小学校で困らないように教えておく」という視点だけではなく、「子どもが安心して学びに向かえるよう、大人がどんな姿を示すか」という視点を大切にしたいものです。

子どもは、大人の言葉を聞いて育つだけではなく、大人の姿を見て育ちます。

「教えなくてはい」と肩に力を入れる前に、まず私たち自身が子どもにとっての「見本」になっているかを振り返ってみる。そんな小さな意識の変化が、子どもの大きな学びにつながっていくのではないのでしょうか。